

長崎平和公園の成立

－ 場所の系譜の諸断片 －

大 平 晃 久

The formation of Nagasaki Peace Park:
Some Fragments of Genealogy of the Place

Teruhisa OHIRA

はじめに

平和公園は長崎市松山町の高台、正確には侵食の進んだ河岸段丘面に位置する(図1)。平和祈念像が立つこの公園は、毎年8月9日の「原爆犠牲者慰霊平和祈念式典」の場であり、多くの人が訪れる観光地でもある。なお、ここでいう平和公園は、正式には広大な平和公園の一部の「願いのゾーン」であるが¹⁾、以下では通例に従い「平和公園」と呼ぶ。原爆という未曾有の惨事を追悼し平和を祈念するために設けられたこの平和公園は、まさに長崎/日本/世界にとっての「記憶の場²⁾」であるといえることができる。

本稿は、この平和公園を対象に、原爆投下・終戦からおおよそ1955年の平和祈念像建設までの経緯を追う。平和公園という場所をめぐるさまざまな計画が次々と立てられてい

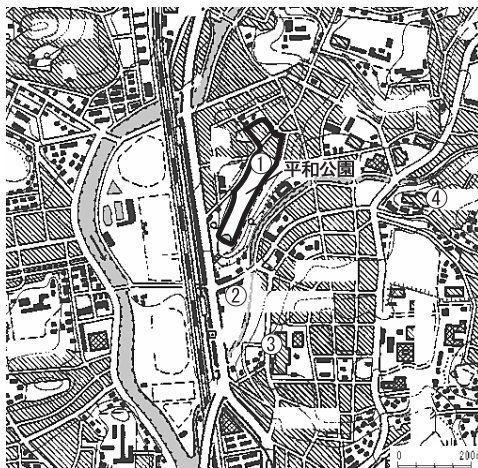


図1 長崎平和公園とその周辺

平和祈念像 爆心地碑(原爆落下中心碑)
国際文化会館(現原爆資料館) 浦上天主堂
復興平和博覧会場

数値地図25,000(2万5千分の1地形図「長崎西北部」
1996年)を基に作成。

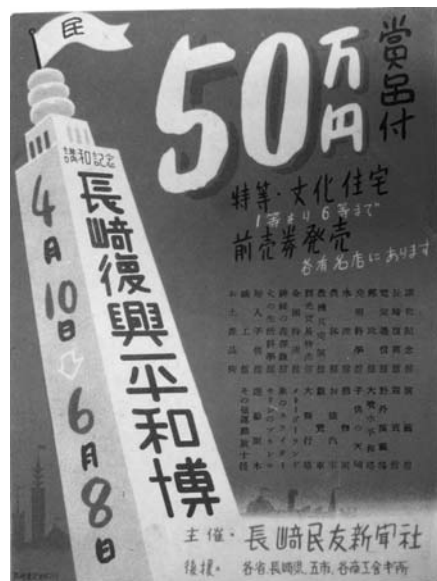


図2 長崎復興平和博覧会の宣伝チラシ

資料所蔵：株式会社乃村工藝社

たことを示していく。その際、現在の平和公園を会場として開催された長崎復興平和博覧会をやや詳しくみる。これは、当時の新聞記事以外の資料としては管見の限りチラシ（図2）、絵葉書しかないこともあってか、この博覧会について従来ほとんど紹介されていないこと、『新長崎市史』でも会場の場所すら示されず扱いが小さいこと³⁾による。そして、平和公園という場所の成立過程を追った上で、「記憶の場」としての平和公園の特性を、広島との比較から検討する。そして、米山リサ⁴⁾による「記憶景観の馴致」という議論にどのようにつながることができるかいささかの検討を行う。

既往研究を概観するなら、まず末廣真由美「長崎平和公園」⁵⁾は最も本稿と関心が近く、平和公園という場所に焦点を当てて記憶を考察している。ただし、復興平和博覧会には一切言及がないように、事実の提示や考察にやや粗い部分があるように思われる。次に、奥田博子『原爆の記憶』⁶⁾は長崎、広島の前爆の表象について総合的に記述しており、復興平和博覧会にも開催場所を含め言及している。ただし、平和公園に焦点を当てて細かな経緯を示したりしているわけではない。最後に、福間良明『焦土の記憶』⁷⁾は広島との比較で長崎の前爆言説史が扱われており、多くの教示を得た。しかし、当然ながら平和公園という「記憶の場」に焦点が当てられているわけではない。

本稿が扱うのは、1945年からおよそ1955年までの平和公園の景観・表象の復原であり、時間的にも空間的にも狭い、場所の系譜の諸断片にすぎない。しかし、上記の既往研究で見逃されている事象を中心に、「記憶の場」としての平和公園がどのように成立したか、わずかでも明らかにし、それが持つ意味を考察していきたい。

2つのモニュメントの流れ

平和公園の系譜をみていくのに先立って、原爆関係モニュメント⁸⁾をめぐる動き全体を整理しておきたい。戦後、平和祈念像建立までの長崎の前爆関係モニュメントは、2つの流れからなるものとして、すなわち、ひとつは高塔、もうひとつは爆心地碑という2つの流れに分けてとらえることができる。

終戦後、初めてモニュメントの建立を公に提案したのは当時長崎新聞会長を務めていた西岡竹次郎である。西岡は『長崎新聞』紙上に、長崎をエルサレムになぞらえ、「一大記念塔を建立」することを主張した⁹⁾。そこでは「記念塔」の位置は特定されていないが、続いて長崎市によって示された「供養塔」・「霊塔」の案はいずれも、のちの国際文化会館（現在の原爆資料館）付近への建設を提示しており¹⁰⁾、高塔の流れが形作られたといえる。

国際文化会館に直接つながる提案として最も早いのは、管見の限り、1948年8月9日付『長崎日日新聞』に長崎市の案として示されたものである。すなわち、図書室や原爆資料室を備えた「コンクリート五階建の塔」が提案されている¹¹⁾。建設地は明記されていないが、杉本亀吉（当時長崎市議）の回想から、爆心地ではなくのちの国際文化会館の位置であると判断できる¹²⁾。ただし、その後も同所に記念建造物ではない「丈余の記念碑」を設けるという案も示されている¹³⁾。

1950年11月に示された国際文化会館の当初案は9階建てで「高層塔」として位置づけられていた¹⁴⁾。しかし、おそらくは予算不足のため、着工は1952年4月末まで延び¹⁵⁾、6階建に変更された。とはいえ、1955年4月の開館間もないころのものと思われる同館のパンフレットには、同館の西側（爆心地側）壁面は「七万余の原爆犠牲者の供養塔を表し」



図3 爆心地公園と国際文化会館

1956年ごろの絵葉書。左のモニュメントが爆心地碑（原爆落下中心碑）。

造船所が女子挺身隊の宿舎として買収していた²⁰⁾。そのためか、1948年8月という早い時期に公園化（現在の爆心地公園）されている²¹⁾。公園化後の1949年5月には長崎市原爆資料館が公園内に設けられ²²⁾、また、公的な原爆慰霊行事の場として1954年まで利用された²³⁾。なお爆心地公園やのちの平和公園、また東側の野球場や陸上競技場を含む広大な範囲は、1946年9月の戦災復興計画で公園として設定されていた²⁴⁾。それが、面積を減ぜられた上で長崎国際文化都市建設事業計画（1949年10月）に記念施設（「国際平和公園」）として位置づけられることになった。

さて、木製の角柱に代わる本格的な爆心地碑についても様々な案が提出されている。新聞で報道されたものを列挙するだけでも、「錐型塔」（1946年5月⁵⁾、「純東洋式五重塔」（1949年7月⁶⁾、元忠魂碑（長崎公園）の台座の利用（1949年9月⁷⁾、山王神社鳥居の柱と地球儀（1950年7月⁸⁾となる。

そのような中で、彫刻家北村西望自身による男神像の提案に、爆心地碑に関して検討を行っていた原爆資料保存委員会²⁹⁾が賛同し、爆心地碑として平和祈念像の建設が推進されていくことになる³⁰⁾。同委員会が1950年10月に催した爆心地碑について東京在住の各界で活躍する県人に意見を求める会合で、出席者の北村が男神像を自ら手掛けることを訴えたのである。同委員会は1950年11月に北村案支持を決定³¹⁾、1951年3月に市議会が平和祈念像関係予算を可決し³²⁾、正式に決定した。なお、経費は全額寄付金によるものとされている。

その後、平和祈念像には、長崎市街東側の風頭山への建設位置変更を求める動きが起こる。1952年1月22日に風頭山観光施設期成同盟（地元町内会など）が平和祈念像の風頭山への建設を長崎市議会に請願したのをきっかけに³³⁾、市議会、地元紙上でしばらく論争が起こった。風頭山を主張する側は、観光面のメリットや市全体のモニュメントであることをあげ、爆心地を主張する側は慰霊を重視した論を展開している³⁴⁾。末廣はこうした対立を、平和祈念と慰霊の位相の違い、平和を祈念する主体（市民全体）と慰霊を行う主体（旧浦上住民）の分裂に起因するものと論じている³⁵⁾。なお、当時、平和祈念像の建設地に擬せられた場所は、爆心地、風頭山以外にも、稲佐山、西坂公園、琴平町など多数あったらしい³⁶⁾。

たもの¹⁶⁾とされている（図3）。また、設計者の佐藤武夫は同館の南に延びる新浦上街道（電車通り）からのヴィスタを重視したことを述べている¹⁷⁾。まさしく戦後すぐから同所に構想された高塔の流れに属するモニュメントであるといえるだろう。

一方、中心地には早くから標識が設置されていた。初代の小円柱は1945年10月に設置され¹⁸⁾、その後矢印型の2代目を経て、白く塗られた木製の角柱の3代目が1948年8月までに設置されている¹⁹⁾。

爆心地は元々高見家別荘で、三菱長崎

桑原用二郎長崎日日新聞社長が同紙上で平和祈念像そのものの再検討を求める³⁷⁾など混乱は続いた。しかし、結局、1953年7月になって市議会が風頭山の請願を否決し、爆心地に平和祈念像を建設することに決まっている³⁸⁾。

平和公園の変遷

(1) ABCC 構想 ここまで長崎における原爆関係モニュメントに2つの流れがあることをみてきたが、現在では全く違ったものになっている。それは平和公園・平和祈念像が「記憶の場」として新たに付け加わった結果とあってよい。

平和公園は戦前の長崎刑務所浦上刑務支所の敷地と重なる。原爆投下当時81人の人々がここに収容されていたこと、その過半数が中国や朝鮮の出身者であったことはさまざまに告発されている³⁹⁾。原爆投下から1年後のこの刑務所跡について『長崎新聞』紙上に次のようなルポがある。

「かつては一般人が知ることも出来なかつた浦上刑務所も多くの囚人や未決囚と共に一瞬にして吹飛んでしまつた、所々に残つてゐる高塀はこの中にあつてひたすら悔悟の数ヶ月或は数年を過した人達の記録をきざんでゐるかの様である、昼でさへ刑務所跡は何か不気味さを覚へるが、こゝも処々芋藪畑として耕され更生する姿の如く青々と繁つてゐるその片隅で諫早刑務所の人々であらう十名近くの一団で整地作業をしてゐた⁴⁰⁾。

上でもみたように、この一帯は戦災復興計画で大公園とされていた。そのことについて、当時、長崎県庁の都市計画技術者だった向井武治氏は、軽微な罪で刑務所に入れられて原爆で亡くなった人たちを慰霊するという考えがあつたことを述べている⁴¹⁾。公園が徐々に蚕食されても刑務支所跡は公園として維持されており⁴²⁾、ここには一時期、長崎市内の公園や街路に植樹するための大きな苗圃もあつた⁴³⁾。

その後、ここはさまざまな変転をたどる。長崎地方裁判所長で原爆資料保存委員長を務めた石田 寿は、平和祈念像の建設地について「原爆中心地の低いところよりその直ぐそばの高丘で刑務支所跡（長崎拘留所も同所にあつた）が一番良いと思つて、強く左様申したのですが、これは当時米国の原爆症研究の病院（ABCC）建設予定地とせられていて、全くどうにもならぬとのことで問題にせられませんでした」と回想している⁴⁴⁾。これは1951年の前半のことと思われ、ABCC（原爆傷害調査委員会）が平和公園に建設予定であつたということは興味深い。また同じ時期には国際文化会館の建設場所を刑務所跡に移すべきという意見があつたことが報じられている⁴⁵⁾。

ABCCの移転は行われず、1951年以降、ここを公園として整備する計画が報道される⁴⁶⁾。しかし、実際にはその前に長崎復興平和博覧会の会場になつた。

(2) 復興平和博覧会開催 長崎復興平和博覧会は、1952年4月10日から6月18日までの期間⁴⁷⁾、長崎民友新聞社の主催で開催された。会場は図1に示したように現在の平和公園と隣接地で、平和祈念像に向かって左あたりが入場ゲートであつた。博覧会の宣伝や報道ではここが刑務支所跡であることは全く示されておらず、ただ「原爆中心地高台」「原爆の丘」と示されていることは興味深い。開幕日の『長崎民友新聞』によれば、総坪数2万5千坪、総工費1億5千万円で、「終戦後初の国内最大の博覧会として、全日本に問う規模壮大なもの」である⁴⁸⁾。

管見の限り、この博覧会は同年2月1日の『長崎民友新聞』で初めて告知された⁴⁹⁾。そ

ここでは博覧会の目的が、「講和の春を迎えて、県民の皆さんと本県の産業の復興、救国輸出の増大課程、伝統を誇る風俗、山紫明眉の壮麗を再認識すると共に、独立日本の明日への雄飛を目指して」⁵⁰⁾のものであると示されている。また西岡ハル社長は挨拶のなかで「わが長崎の真の復興や今後の復興の意図それから、平和への願望を一堂に集め、合わせて、わが長崎が誇る産業、貿易、観光、芸能の粋を披歴して、広く内外に紹介いたす試み」⁵¹⁾であると述べている。そこからもわかるように、特に原爆がテーマにはなっていない。

博覧会の内容、つまり展示館を列記すると次のとおりである。なお展示館の名称や表記は一定ではないが、ここでは4月17日付の新聞広告に従った。*印は別料金を必要とする施設（「子供の天国」はアトラクションごと）である。

講和記念館、長崎復興館、観光貿易物産館、礦工館、産業館、全国特産館、火の生活科学館、発明科学館、電気通信館、郵政館、水産館、農林館、婦人子供館、農機具実演館、自動車特設館、全国物産館

（娯楽が中心のもの）室内演芸館*、屋外演芸場、神秘の森*、子供の天国*、動物園

いくらかでも原爆に関わるのは県内5市（長崎、佐世保、諫早、島原、大村）の出品物で構成された「長崎復興館」だけで、長崎市の出品物として「国際文化都市長崎の構想と計画、戦前と原爆後の長崎、長崎市の大パノラマ」などがあげられている⁵²⁾。原子力の平和利用といった内容はみあたらない。

入場料は大人120円、子ども70円で、特等賞品「文化住宅1棟」を含む抽選券付きの前売券も発売された（大人100円、子ども60円）⁵³⁾。100万人の入場者を見込むとあるが⁵⁴⁾、実際は20数万人にとどまっている⁵⁵⁾。これは同時期の他の地方博覧会と比べて少ない⁵⁶⁾。

『長崎民友新聞』紙上では、当然ではあるが、開幕までは期待をあおるような紹介、開幕後は出し物の内容や入場者のインタビューなどが連日報道されている。どこからどういう団体が来る（来た）といった、団体での来場を誘うような報道も目に付く。

『長崎民友新聞』と復興平和博覧会については、日本航空もく星号の墜落事故（1952年4月9日）における誤報事件が知られている。開幕初日の博覧会に出演するために長崎に



図4 長崎復興平和博覧会会場配置図

新聞広告（長崎民友新聞1952年5月19日）

向かっていた漫談家大辻司郎が、日本航空もく星号の三原山への墜落事故で他の乗客乗員ともども死亡したにも関わらず、各紙が全員救助と報じた上に、『長崎民友新聞』は大辻の生還談話まで載せてしまった⁵⁷⁾。まさに博覧会の開幕に水を差す結果となったばかりか、『新長崎市史』や（長崎日日新聞との統合後の）『長崎新聞社史』は、この信用失墜が社運を傾けたと

論じている⁵⁸⁾。

さらに、博覧会には長崎県からの補助金をめぐる問題なども浮上した⁵⁹⁾。5月定例県議会議では、500万円の県費補助金支出や県営バスの博覧会のための臨時運行が問題となり、『長崎日日新聞』によって連日報道された⁶⁰⁾。結局は原案通り可決されている⁶¹⁾。なお、長崎市議会でも同様に補助金が問題となり、200万円から100万円に半減して可決されている⁶²⁾。このほかにも博覧会従業員賃金未払い問題や販売商品の代金未払いが県議会で取り上げられている⁶³⁾。

また、博覧会の祝祭的なあり方への批判もみられた。シアース長崎大学経済学部教授は『朝日新聞』紙上で「数百万の金を恐るべき平和像のために投ずる」ことや、「けばけばしい、むしろくだらぬ平和博に五百万円をつぎこむ」ことを批判し、文化都市として長崎大学の整備の必要性を主張した⁶⁴⁾。それに対して西岡社長は『長崎民友新聞』に「くだらぬ、とはどんな点か 長崎大学、シアース教授にお尋ねします」と題する反論を発表し、博覧会の意義を述べるとともに、教授の論を高踏的なものとして退けている⁶⁵⁾。

長崎復興平和博覧会は、さして目覚ましい内容や意義があったわけではない。しかし以上みたように、長崎の原爆後史として興味深い事件であり、平和公園という場所の系譜をみるうえで無視できないできごとであったということができよう。

(3) 県立体育館構想・平和祈念像建設へ 博覧会終了後、公園としての整備が行われ、1953年春にはほぼ完成する⁶⁶⁾。しかし、平和公園は再び各種施設の用地として構想されることになる。

そのひとつが、県立体育館構想である。長崎国際文化都市建設計画の一環として、各種文化施設からなる「長崎国際文化センター」が構想された。1954年3月に県が作成した「長崎国際総合文化センター設置計画」には、体育館とプールを「平和博覧会場跡」に設置することが盛り込まれ⁶⁷⁾、5月には新聞報道も行われている⁶⁸⁾。なお、実際には体育館・プールの整備はその後全く進まず、体育館は1961年、プールは1960年になってようやく別の場所に整備された。

もう一つ、すなわち最終的にこの場所を占めることになる平和祈念像は、1954年8月になって爆心地からこの平和公園に建設位置が変更された⁶⁹⁾。それに先立つ6月中旬、田川務長崎市長が東京井の頭にある北村西望のアトリエを訪問し、次のように語ったと報道されている⁷⁰⁾。「梅雨があけましたら先生に来て頂いて、建設地の位置をきめたいと思います。いま、長崎では大体像の模型を木組みで作り、ここと思われる所に立っています…公園の設計も変つていますし、或は周囲の関係から、今考えているものと現地を見てのとは、違うこともありましょう」。すなわち、この時点で、長崎市側では平和祈念像の建設地を爆心地から変更することを決め、建設予定地点に「像の木組み」を作っていたことになる。これが現在の平和祈念像の位置であるかどうかは判断する根拠がない。しかし、建設スペースの点から考えても、爆心地公園以外であるなら平和公園のどこかであった可能性が高いと思われる。

なお、北村西望の長崎訪問は、梅雨明け後ではなく、8月7日の夕方にまでずれこんでいる。その長崎到着時点で北村は「建立地は原爆中心地付近が適当だろうと考えている」と述べていた⁷¹⁾。ただし、平和祈念像の建設位置について、北村自身は「『低地よりも高地がよい』と希望して」いるという伝聞が以前に報じられたことがあった⁷²⁾。

ところで、6月中旬にすでに平和公園が平和祈念像の建設地に決まっていた「像の木組み」ができていたとすれば、先述の県立体育館構想の新聞報道（5月）とは時期的に重なっていることになる。同じ時期に長崎市と長崎県とが別の利用案を平和公園について持っていたということになるのか。

平和祈念像の現地平和公園での建設工事は1954年11月から始められ⁷³⁾、1955年8月8日に除幕式を迎えた。翌日からは、毎年「原爆犠牲者慰霊並びに平和祈念式典」（1973年からは「原爆犠牲者慰霊平和祈念式典」）がこの平和祈念像の前で開催されるようになっている。また、爆心地碑は1956年3月に建て替えられ、「原爆落下中心碑」と呼ばれるようになった⁷⁴⁾。

「記憶の場」としての平和公園

(1) 平和公園と平和祈念像の位相　ここまで、平和公園成立の経緯を断片的ながらたどってきた。以下では、「記憶の場」としての平和公園、平和祈念像の位相を、広島と比較することによって、いくらか検討する。そして、米山によって広島原爆とその「記憶の場」をめぐる展開された「記憶景観の馴致」の議論につなげたい。

まず、平和祈念像が当初予定されていなかった平和公園に建設されたために、平和公園は広島平和記念公園のようなモニュメンタリズムに欠けることになった。丹下健三の設計による広島平和記念公園は、原爆ドーム、原爆死没者慰霊碑（広島平和都市記念碑）、平和資料館が一直線のヴィスタ上に並び、きわめてモニュメンタルなありようをしている。一方、長崎平和公園は、現状こそ度重なる整備、特に1969年8月の「平和の泉」の整備、1994～97年の公園全体の再整備をへて、公園内で階段・エスカレーターから平和祈念像まで一直線につながる軸線が作られている。しかし、元々は全くそのようなものなかった。また、平和祈念像と爆心地碑（原爆落下中心碑）は切り離され、何か景観的に結びつけられたいはしていない。現在、平和祈念像の正面は稲佐山への軸であるとされているが⁷⁵⁾、これは後付の理屈であって、細長い河岸段丘面の地形に合わせただけであるといえよう。刑務支所、復興平和博覧会場も同じく地形に合わせた矩形の敷地になっていた。

2つめに、平和祈念像には長らく不評がついて回った⁷⁶⁾一方で、爆心地碑（原爆落下中心碑）はアウラをまとったモニュメントとして認められてきたこと⁷⁷⁾があげられる。元来、爆心地碑として平和祈念像が構想されていたこと考えると皮肉ではあるが、爆心地が真正な慰霊の場所とみなされること、また碑の形態が無標であることがその要因であろう。広島では爆心地（島病院）には記念碑は設置されているもののメインの「記憶の場」ではない。それに対し、長崎では爆心地こそが最も価値を置かれる「記憶の場」であり続けてきた。浦上天主堂が最高の「記憶の場」であるとする見方もあるが、少なくとも1955年以前に限れば、爆心地こそがさまざまな慰霊行事の場として常に用いられ、新聞紙上でも最もよく目にする「記憶の場」であるといえるだろう⁷⁸⁾。天主堂の保存運動があまり広がりを持たなかったこともその傍証になるのか⁷⁹⁾。

3点目に、新たな「記憶の場」、平和公園と平和祈念像の出現は、従来からの「記憶の場」である爆心地公園と国際文化会館にも少なからず影響を与えたことが指摘できる。すなわち、爆心地公園と国際文化会館だけで主な記憶景観が形作られているというコンパクトさ、濃密さが失われるとともに、国際文化会館のモニュメントとしての位置づけがあい

まいになったことがあげられよう。上述したように、平和公園と爆心地公園は浦上天主堂通りと市街地で隔てられ、ヴィスタで結びつけられたりはしていない。しかし、かつての爆心地公園と国際文化会館については、爆心地碑（原爆落下中心碑）と国際文化会館の2つのモニュメントは一望のもとに収まり、それなりにモニュメンタルな景観を形作っていた、あるいは将来的に形作る可能性があったといえる。また、国際文化会館は高塔の流れを汲むモニュメントとして建設されたが、平和祈念像の出現によって、爆心地とは別の位置のモニュメントとして、意味づけや性格が重なることになった。国際文化会館が1996年に建て替えられ、形状が高塔ではなくなったのは、モニュメントとしての位置づけがあいまいになっていたことも影響していよう⁸⁰⁾。

(2) 記憶景観 さて、こうした平和公園と平和祈念像をめぐる考察は、米山による「記憶景観の馴致」という発想とどう接合できるだろうか。米山は1970年代以降の広島を事例とした論考の中で、「戦争と原爆の物理的痕跡の一扫や、空間的・時間的な封じ込めを通しての記憶の再定義をとまなう」「記憶景観の馴致」という概念を提示している⁸¹⁾。原爆に関わる記憶景観を扱うにあたってこの概念に言及しないわけにはいかない。長崎平和公園、平和祈念像は「記憶景観の馴致」という概念からどのように論じることができるだろうか。

本稿でここまでみてきたのは、米山が扱ったのよりも前の時代である。長崎ではこの時期、「封じ込め」の基盤ができつつあるとみてよい。すなわち、平和公園・平和祈念像が新たな記憶景観として作られていく。その一方で、1958年に浦上天主堂が取り壊され、その後、爆心地公園に天主堂やそれ以外の原爆遺構が移築されるなど、明らかに「封じ込め」られていくことを知っている。

なお、阿部亮吾は、広島の1945～52年における原爆遺構をめぐる状況にもこの「記憶景観の馴致」という概念が適用できると論じている⁸²⁾。阿部はこの時期に原爆ドームが「『唯一の』原爆遺跡」などと表現され始めることに着目して、「封じ込め」が表象のレベルで始まっていることを示した。卓見であるが、長崎にあっては原爆ドームのような「封じ込め」の中核をなす存在自体がないため、広島のようにいうことはできない。

では、長崎の同時期にも「記憶景観の馴致」概念が適用できるとして、広島とはどのような違いがあるといえるだろうか。あくまで1955年以前の平和公園・平和祈念像を対象とした検討からではあるが、2点指摘したい。1つは、記憶景観の新しい主要な構成要素として平和祈念像が追加されていること。平和祈念像はその後、時として原爆ドームに比肩するモニュメントとして扱われうる存在にまでなっている⁸³⁾。2つめは、記憶景観が原爆ドームのような被爆建造物としての真正性ではなく、場所の真正性（爆心地）に支えられていること。浦上天主堂のようなシンボリックな被爆建造物を残せなかった長崎にとって、記憶景観が全くの空虚なるものとみなされていないのは、爆心地（原爆落下中心碑）の存在が大きいと考えられる。

記憶景観の「封じ込め」に関連して、もう一つ指摘しておきたいのは、スケールをめぐる問題である。「封じ込め」とはまさに空間的な概念であるが、決して一義的に範囲が確定するわけではない。つまり、「爆心地」といってもどういうスケールでとらえ、どこまで含めるのかは、決して一意的に決まらない。長崎の例では、国際文化会館すら爆心地ではないという議論が行われたり⁸⁴⁾、逆に、平和公園も爆心地であるとして平和祈念像建設

が進められたりしている⁸⁵⁾。どの範囲が爆心地（あるいは「封じ込め」られるべき領域）として、どのような政治的な文脈の中で主張されていくかみていくことが、「封じ込め」の議論には必要になる。

同様のスケールの問題に、上述の平和祈念像の建設地問題（1952年）、すなわち、爆心地か風頭山かの論争がある。末廣が論じたように、この対立は慰霊と平和祈念の主体の問題としてみることもできるだろう。しかし、それはとりもなおさずスケールの政治⁸⁶⁾というべき問題であり、原爆被災区域、長崎市、...といった複数のスケールのうち1つを恣意的に選び出して建設位置を主張しているとみることができる。

おわりに

本稿は、長崎平和公園を対象に、原爆投下・終戦からおおよそ1955年の平和祈念像建設までの経緯を追ってきた。ここで明らかにしたことは次の4点にまとめられる。

平和祈念像建立までの原爆関係モニュメントは、高塔と爆心地碑という2つの流れに分けてとらえられること

現在の平和公園は、戦後、ABCC 候補地、復興平和博覧会会場、県立体育館候補地、平和祈念像建設地と変遷したこと

そのようにして成立した平和公園は、モニュメンタルさやアウラに欠けるとともに、従来からの「記憶の場」である爆心地公園と国際文化会館にもマイナスの影響を与えたこと

平和公園の成立は米山の「記憶景観の馴致」という議論でとらえることができるが、広島とは違いもあること、また記憶景観の「封じ込め」を考察するに当たってはスケールが大きな意味を持つこと

より長いスパンで平和公園という場所の系譜をとらえていくことが今後当然必要になる。また本稿では、復興平和博覧会の開幕までの経緯や、爆心地に対する評価の変遷など、問題の所在を指摘するにとどまった部分がある。今後の課題としたい。

注

- 1) 平和公園は、正式には爆心地や原爆資料館の敷地、西側の野球場などのスポーツ施設まで含む。
- 2) 「記憶の場 lieux de mémoire」はフランスの歴史家、ノラによる概念で、地理学的な意味での場所だけでなく、集合的記憶が根ざす何ものかをさす。ノラ、P. 著、永井伸仁訳「序論 - 記憶と歴史のはざまに」(ノラ、P. 編、谷川稔監訳『記憶の場 - フランス国民意識の文化 = 社会史第1巻対立』岩波書店、2002(原著1984)) 29-56頁。
- 3) 長崎市史編さん委員会編『新長崎市史第4巻現代編』長崎市、2013、761頁。
- 4) 米山リサ(小沢弘明・小澤祥子・小田島勝浩訳)『広島 - 記憶のポリテクス』岩波書店、2005(原著1999)。
- 5) 末廣真由美「長崎平和公園 - 慰霊と平和祈念のはざままで」(小佐野重利・木下直之編『死生学第4巻』死と死後をめぐるイメージと文化』東京大学出版会、2008) 199-232頁。
- 6) 奥田博子『原爆の記憶 - ヒロシマ/ナガサキの思想』慶応義塾大学出版会、2010。

- 7) 福間良明『焦土の記憶 - 沖縄・広島・長崎に映る戦後』新曜社, 2011。
- 8) 記念碑, 記念プレート, 記念標柱, 記念建築, また慰霊碑や彫像まで含めて「モニュメント」の語を使用する。西山良平「モニュメントの可能性」史林91(1), 2008, 264頁。
- 9) 西岡竹次郎「“新長崎再建の道”(中) 浦上に大飛行場を 一大オイル・ステーション建設の急務」長崎新聞1945年9月26日。
- 10) 岡田壽吉長崎市長による「浦上の高台」案(長崎新聞1945年10月26日), 長崎市による高さ100mの「長崎医大附近の丘陵」案(長崎新聞1946年6月5日)。なお, 1946年9月に矢内保夫県土木計画課長が「原子爆弾の供養塔」を設ける案を示しているが位置は不明。新木武志「長崎の原爆被災と戦後復興」長崎大学東アジア共生プロジェクトワーキングペーパー10, 2013, 5頁。
- 11) 「浦上に緑の聖域 放送局裏に殉教の祭場を設く 市が描く観光長崎の縮図」長崎日日新聞1948年8月9日。
- 12) 杉本は, 国際文化都市建設法施行(1949年8月9日)前後に, 渡辺重良・市土木課長による「川向こうに五重の塔」を建てる案があったことを示しているが, この「川向こうに五重の塔」と「コンクリート五階建の塔」とは3千万円の予算まで同じである。この「川向こう」が爆心地の「川向こう」, のちの国際文化会館の位置であることは疑いない。杉本亀吉「平和祈念像建設事業の回想」(平和祈念像建設協賛会編『平和祈念像の精神』平和祈念像建設協賛会, 1955) 18-21頁。また, これは杉本の別の回想録にある渡辺課長の提案になる「奈良の五重の塔のような建物」とも同一であろう。杉本亀吉『原子雲の下に』杉本亀吉, 1972, 142頁。
- 13) 「お祭り騒ぎは止め ことしの原爆記念日行事決る」長崎民友新聞1950年5月13日。
- 14) 「長崎に国際文化会館」長崎民友新聞1950年11月7日。
- 15) 「長崎市 文化会館の着工は今秋 刑務所跡には国際記念公園」長崎民友新聞1951年8月15日, 「完成は明年四月 長崎国際文化会館きょう起工」長崎日日新聞1952年4月28日。
- 16) 『長崎国際文化会館』(パンフレット)長崎国際文化会館, 発行年不明。
- 17) 佐藤武夫「長崎国際文化会館」建築文化10(8), 1955, 7-12頁。
- 18) 文部省による原子爆弾災害調査研究特別委員会によって1945年10月5日に設置, ただし, 「12月再調査のときには取り去られていた」という。仁科記念財団編『原子爆弾 - 広島・長崎の写真と記録』光風社書店, 1973, ページなし。次の新聞記事(11月9日付)は同調査委員会のメンバーによって「爆心地標柱」設置が提案されたことを報じており, 最初の「爆心地碑」はごく短い期間しか設置されていなかったことがわかる。「『爆心地標柱』設置案起る」長崎新聞1945年11月9日。
- 19) 1948年8月10日付『長崎民友新聞』紙面の写真に確認できる。後述の公園整備とともに設置されたものであろう。
- 20) 長崎市編『長崎原爆戦災誌第2巻地域編』長崎国際文化会館, 1979, 43頁。
- 21) 「9日 - 15日 長崎貿易まつり 原爆中心地に公園化計画」長崎日日新聞1947年8月6日。1年後には「アトム公園の開園式」と報道された。「あの日から三年復興する長崎市 爆心地で復興祭 市が繰展ぐ多彩な行事」長崎日日新聞1948年8月9日。な

お、この公園の開園当時の正式名称は「松山公園」(上記新聞のように「アトム公園」などとも呼ばれた)で後には平和公園に包摂されるが、以下では通例に従い「爆心地公園」と呼ぶ。

- 22) 「長崎市に原爆資料館 松山町のアトム公園に」長崎民友新聞1949年5月7日。なお、この資料館は上述の長崎国際文化会館が開館するとその中に移された。
- 23) 1946年、47年の慰霊行事はいずれも三菱駒場寮跡地(現在の松山町電停西側、陸上競技場北東部)で行われた。
- 24) 矢内保夫「長崎市復興計画の概要」新都市119, 1947, 16-19頁。
- 25) 前掲10)。
- 26) 「国際文化都市建設計画試案」(1949年7月)のうち「国際観光都市計画」にある「平和塔」の提案。長崎民友新聞1949年7月15日など。ただし、この五重塔はのちの国際文化会館の位置を想定している可能性もある。「長崎国際文化都市建設実施計画案」(1949年10月)では「記念塔」となっており、これも爆心地かのちの国際文化会館の位置が不明である。長崎市議会編『長崎市議会史記述編第3巻』長崎市議会, 1997, 277頁。
- 27) 「長崎原爆死傷者は十五万 資料保存委員会が新説」長崎民友新聞1949年9月10日。なお、この記事には「平和の女神のブロンズ像を本県出身の彫刻家北村西望氏に依頼製作しようとの意見もある」と報じられている。
- 28) 「山王神社の鳥居が 原爆中心碑に アトム記念日まで完成」長崎民友新聞1950年7月25日。なお、杉本はこの案で長崎市内部ではいったん決定になっていたと述べている。前掲12) 18頁。
- 29) 前掲26) 390頁。
- 30) 前掲12) 143-144頁。
- 31) 「原爆公園に平和記念塔 大仏(奈良)より大きい 長崎にまた名所ひとつ」長崎民友新聞1950年11月25日。
- 32) 長崎市議会編『長崎市議会史資料編第2巻』長崎市議会, 1993, 795頁。
- 33) 「風頭山頂に平和記念像 関係五十力町が市議会に請願」長崎民友新聞1952年1月23日。
- 34) 「対角線 平和祈念像の建設地は？」朝日新聞長崎版1952年1月29日, 「長崎の平和祈念像 男神・女神も出て賛否交々の紙上討論」長崎民友新聞1952年2月5日など。
- 35) 前掲5) 223・225頁。
- 36) 杉本亀吉「平和像に三つの要素 森高氏の誤解をとく」長崎民友新聞1952年2月13日。また市議会建設委員会が建設候補地について市内の自治会長、民生委員などを対象に行ったアンケート調査ではさらに多様な候補地があげられている。前掲26) 866頁。
- 37) 桑原用二郎「独立回復と長崎 平和祈念像の再検討を要望」長崎日日新聞1952年4月28日。
- 38) 「平和像 爆心地に建設 四年振り 長崎市建設委員会で本決まり」長崎日日新聞1953年7月9日。
- 39) たとえば次の文献がある。平野伸人「旧長崎刑務所浦上刑務支所(現・平和公園)」

- (「原爆と防空壕」刊行委員会編『原爆と防空壕』長崎新聞社, 2012) 134-139頁。
- 40) 「平和と建設の一ヶ年 原子の町を行く」長崎新聞1946年8月4日。
 - 41) 石丸紀興『長崎市の戦災復興計画と事業 - いくつかの談話と資料等による記録』石丸紀興, 1983, 23頁。
 - 42) ただし, 詳細は不明であるが, 当時, 都市計画に関わった秋口慶二氏によれば, 1949年以前に「平和公園のあそこのところに小学校をもって来るという話」があったという。前掲41) 45頁。
 - 43) 前掲41) 18・28-29・45頁。
 - 44) 石田 寿「発願当時の思い出(1)」(平和祈念像建設協賛会編『平和祈念像の精神』平和祈念像建設協賛会, 1955) 16頁。なお, ABCC(原爆傷害調査委員会 Atomic Bomb Casualty Commission)は調査機関であり, 病院ではない。長崎 ABCCは1948年7月に新興善救護所に設置, 1950年7月に桜馬場の長崎県教育会館に移転し, その後再移転等は行われなかった。
 - 45) 都市計画審議会の議事として報道されている。「長崎市 文化会館の着工は今秋 刑務所跡には国際記念公園」長崎民友新聞1951年8月15日。また市議会では上述の杉本亀吉市議が同様の発言を行っている。前掲26) 838頁。
 - 46) 前掲15) 「文化会館 完成は廿九年度 原爆公園も直ちに着工」夕刊長崎日日新聞1952年1月23日。
 - 47) 当初の予定は6月8日までであったが10日間延長された。さらに2日間の無料開放が行われたので, 実質的には6月20日まで開催されたとみることできる。
 - 48) 長崎民友新聞1952年4月10日。
 - 49) 同じ紙面には「長い間の沈黙を破つて計画した」との文言もあり, 相当以前から構想されていたのだとすれば, 福間が指摘した戦後の祝祭的な原爆表象の流れに位置づけることもできるだろう。前掲7) 221-226・240-248頁。長崎民友新聞, あるいは社長(当時)の西岡竹次郎は, 1947年に広島が「平和祭」を盛大に開催するのに対し, 長崎では自社後援の盆踊り大会を除き特段のイベントがないことについて, 長崎県や長崎市を批判しており 盛大な原爆関係のイベント開催に積極的であったと考えられる。「生きた政治のない証拠 人を入れない住宅が並ぶ 一事が万事消極的な長崎(西岡・知事・副知事・問答(完))」長崎民友新聞1947年8月5日, 「長崎も平和祭をなぜやらぬ 大橋市長と一問一答 政府から指令があつたから出来なかつたのだ」長崎民友新聞1947年8月9日, 西岡竹次郎「平和祭は物語る 長崎のありのままの姿を(公開状 上)」長崎民友新聞1947年8月12日。
 - 50) 長崎民友新聞1952年2月1日。
 - 51) 前掲48)。
 - 52) 前掲48)。
 - 53) 長崎民友新聞1952年2月17日。
 - 54) 長崎民友新聞1952年4月9日。
 - 55) 長崎民友新聞1952年6月19日。ただし, 県議会ではのちに博覧会入場者数の水増し報道あるいは過少申告(入場税)も取り上げられており, この数字にどれほどの信を置いてよいものかは不明である。長崎県議会史編纂委員会編『長崎県議会史第6巻』長

崎県議会事務局，1977，703頁。

- 56) 前後3年間でテーマや開催形態の類似している高岡産業博覧会（1951年，50日間，62万人），福井復興博覧会（1952年，62日間，97万人），あるいはもっとも時期に近い九州の地方博，南国宮崎博覧会（1954年，52日間，約40万人）との比較。「たかおか生涯学習ひろば」<http://www.manabi-takaoka.jp/03/jpn/category/detail/428/1/detail.html>（2014年10月12日閲覧），福井県編『福井県史通史編第6巻近現代二』福井県，1996，615頁，長谷川司「戦後地方博覧会における地域イメージの再構築 南国宮崎博（1954）のケーススタディ」総合政策研究（関西学院）33，2010，105-117頁。
- 57) 博覧会開幕日4月10日の紙面にはこの誤報が大きく踊るとともに，翌日には博覧会開幕を大きく伝える脇に「大辻司郎氏遂に亡し 誤報につき読者に陳謝す」という社告などが掲載された。
- 58) 前掲3)，長崎新聞社社史編纂委員会編『激動を伝えて一世紀 - 長崎新聞社史』長崎新聞社，2001，237頁。なお，長崎民友新聞社と長崎日日新聞社が1959年1月に合併，長崎新聞社となった。
- 59) 戦時下で統合していた長崎新聞社が1946年12月に長崎民友新聞社，長崎日日新聞社などに解体，当時の長崎県知事は長崎民友前社長の西岡竹次郎で，1951年4月の知事当選後は妻の西岡ハルが長崎民友社長を務めていた。そのため，『長崎民友新聞』は県政と党紙とみられており，『長崎日日新聞』とも対立していた。
- 60) 長崎日日新聞1952年5月31日など。
- 61) 「全議案，原案通り通過す 博覧会の内容監査 五票の差で補助金可決」長崎日日新聞1952年6月3日。
- 62) 「長崎市会第四日 結局原案無修正か 平和博補助金問題 本会議できょう表決」長崎日日新聞1952年8月1日，「平和博助成金百万円に削減 あわや活劇！ 老年組浮き腰 狂乱絵図 警察機構改革原案通り」長崎日日新聞1952年8月2日。
- 63) 前掲55) 658・730頁など。
- 64) シアース，R.P.「(市民への公開状1)文化都市」朝日新聞長崎版1952年6月11日。
- 65) 長崎民友新聞1952年6月13日。
- 66) 前掲26) 720頁。
- 67) 長崎国際文化センター建設委員会『復刻長崎国際文化センターの歩み』長崎都市遺産研究会，2014（初版1965），27頁。体育館は地上2階・地下1階で建築面積5332.5m²，競泳プールは50m×20mと25m×20mとされている。長崎国際文化センター建設委員会「長崎国際文化センター 建設計画の概要」（長崎都市遺産研究会編『復刻 長崎国際文化センター建設計画資料』長崎都市遺産研究会，2014（原著1956））18-19頁。
- 68) 「長崎に国際文化センター 体育館や大水族館 県が各種の資料で研究」長崎民友新聞1954年5月3日。
- 69) 後述の北村西望の来崎の際に内定したと報道されている。「来年三月，浦上の丘に『平和祈念像』の鑄造進む」長崎民友新聞1954年9月3日。
- 70) 長崎民友新聞1954年7月5日。
- 71) 「平和像完成は来年半ば 建立地調査へ北村西望氏来崎」長崎日日新聞1954年8月8日。

- 72) 吉岡実雄市議の談話。前掲34)。
- 73) 「きのう清祓式 平和祈念像用地」長崎日日新聞1954年11月12日。
- 74) その後1968年3月に黒御影石貼りに改修され、現在の姿になっている。
- 75) 長崎市『長崎市景観計画』長崎市, 2011, 34・35頁。
- 76) たとえば次を参照。高實康稔「長崎の戦争・原爆記念物批判」(「原爆と防空壕」刊行委員会編『原爆と防空壕』長崎新聞社, 2012) 87-106頁。
- 77) 1996年3月に市が発表した母子像への建替計画をめぐる、激しい反対運動が起こった。前掲76)。その中で深堀総一郎被爆者手帳友の会会長(当時)は中心碑について「四十年間にわたって被爆者や遺族らが祈りをささげてきた聖地」と語っている。「長崎平和式典 被爆者ら欠席」長崎新聞夕刊1996年8月9日。
- 78) むろん、爆心地がアウラを獲得するには、福間が論じるように天主堂がなくなった影響があろう。なお福間は爆心地については何も論じていない。前掲7)。
- 79) たとえば前掲7) 311-313頁など。
- 80) 現在の原爆資料館は、高塔とは正反対のコンセプトで、地上2階・地下2階で屋上緑化がなされた、シンボリックさを排した建築である。設計者(久米設計)の一員である安東は、「当初、タワー状の象徴的な建築も考えてほしい、との要望が一部の声としてあった」と明かしたうえで、「目に見える形としての象徴性は与えないほうがよいと考えた」と述べている。むろん、そうした設計側の発想を長崎市側が受け入れたことに意味がある。安東 直「象徴性を排し、建築を隠す」日経アーキテクチャ 556, 1996, 13頁。
- 81) 前掲4) 105頁。
- 82) 阿部亮吾「平和記念都市ヒロシマと被爆建造物の論争 - 原爆ドームの位相に着目して」人文地理58(2), 2006, 197-213頁。
- 83) たとえば次の論考が該当する。淵ノ上英樹「平和モニュメントと復興」IPSHU 研究報告シリーズ:研究報告40, 2008, 25-63頁。
- 84) 「原爆資料保存館の移転に反対 意義失うと市会の一部で」長崎日日新聞1954年6月8日。爆心地碑の脇からわずか100m移動するだけだが、「中心地にあつてこそ価値」があるという主張があったという。
- 85) 管見の限り、平和祈念像の平和公園への建設地変更に関する公的な議論や報告の存在は知られていない。建設地変更直後の1954年10月に平和祈念像の寄付を募るために発行された冊子を見ると、本文中には建設予定地を「原爆中心地」と記したままだが、冊子の裏表紙には「平和祈念像建設予定地浦上の丘」という文言がある。「原爆中心地」が融通無下に拡大したといえよう。平和記念像建設協賛会・長崎県教職員組合編『平和祈念像 平和祈念像が出来上るまで』長崎市, 1954。
- 86) 山崎孝史「グローバルあるいはローカルなスケールと政治」(水内俊雄編『空間の政治地理(シリーズ人文地理学第4巻)』朝倉書店, 2005) 24-44頁。